

## 1・同級生イジメ報復 地獄の復讐

私は高校生の時に同級生的美詠子から酷いイジメを受けていました。クラスメートの前で服を脱がされて恥をかかされ、それが原因で高校に通う事ができなくなり中退をしたのです。

中卒では就職口もなくアルバイトを転々としましたが、すぐに生活が苦しくなり借金を重ねて返すあてもなくなり、風俗嬢に転落をしてしまいました。しかし、幸いな事に現在やっている SM 店の女王様は私にあっていました。

けれども未だにいじめのトラウマから抜け出せていないのです。お店が終わってお腹が減っていたのもあり、スーパーに行ったところ偶然、美詠子と再会をしたんです。私はこれはチャンスだと思いました。だってもう二度と会う事もないと思っていたんですから。

美詠子「あら、久しぶりね、聡子でしょ。私の事覚えている？」

聡子「ええ、覚えているわ。久しぶりね、今何してるの？」

美詠子「専業主婦よ。夫が忙しくてすれ違いも多いけれどそれなりに楽しいわ。あなたは何をしているの？」

私は美詠子が私をイジメていた事もすっかり忘れてのうのと専業主婦をして幸せに暮らしているのが許せませんでした。

聡子「私は SM 店で女王様やっているの」

美詠子「SM？何それ、あんた高校の時馬鹿だったもんねー。でも SM って何するの？」

聡子「鞭で叩いたり縛ったりよ。ショーもやってるわ」

美詠子「あんた変な方向に行っちゃったのね。最低で変態な方向に行ったんだ。でもショーかあ、ちょっと面白そう」

聡子「良かったら見に来る？私もショーの出るの」

美詠子「へえ、あんたやっぱり変態になったのね。それもそうね、あんた馬鹿だったもんね。学校も辞めちゃうしね〜。でもショーは面白そうね。ちょっとだけ行ってみようかしら」

SMに興味を持った美詠子と連絡先を交換して、私は店に美詠子を呼び出しました。店では私同様にイジメを受けていた優香里と、面白そうだと名乗りを上げた後輩のSM嬢の実紗と真希が私と一緒に美詠子を待っていました。優香里はベテランの人気女王様で、何度もイジメの事を相談した良き友人でもあります。

美詠子「聡子、来たわよ。喉が渴いたわ。カクテルを  
ちょうだい」

傲慢に言い放った美詠子は店に入った途端、異様な  
空気に気が付いたようでした。けれどもさっと実紗  
と真希がドアをガードして、帰ろうとした美詠子の  
邪魔をします。

美詠子「ちょ、ちょっと聡子、どういう事よ。ショー  
はどうしたのよ?!」

聡子「ショー?もちろん、はじまるわよ。そうね、今  
日の主役はあなたね」

怒る美詠子に私はさらっと言いました。美詠子はみるみるうちに顔面蒼白となって帰ろうとしました。

実紗「ここからは帰れませえ〜ん」

真希「もう帰れませーん」

美詠子「な、なによこの子達。嫌よ、私帰る。帰るわ」

美詠子は怖くなってきたらしく、ガタガタ震えながら懇願しました。けれども私が許すはずがありません。すぐさま実紗と真希が美詠子を取り押さえて体をぐるぐると縄で縛り床に転がしました。美詠子はバタバタと暴れますが、隣の部屋ではもうショーの準備が整っているのです。

優香里「あら？ どうしてあなたを帰さなきゃならないのかしら？」

美詠子「離してよ！ 騙したのね、聡子！ 私は変態じゃないわ！ 離しなさい！」

実紗「帰れませんよ～、おばさん」

真希「だって今日の主役はおばさんですもんね～」

美詠子「そんな話聞いてないわよ！ 離しなさい！ 訴えるわよ！」

実紗「離しませ～ん」

真希「だっておばさんはこれから主役になるんですもん～ん」

聡子「これからあるショーはレズ SM ショーなの。そこであなたが主役になることを皆楽しみにしているのよ」

優香里「期待を裏切るわけにはいかないでしょう？もうすぐ開演の時間だわ」

美詠子「ふざけないで！私はレズじゃないわ！誰がそんなショーに出るものですか！」

聡子「あら、私だってレズじゃないわ。だからあなたをきちんと責めてあげられないのよ」

実紗「聡子お姉さまは男相手が一番凄いのよ～」

真希「私達はまだ見習いだけど、いつか聡子お姉さまみたいな女王様になるのよ」

優香里も実紗も真希も美詠子を笑いました。それから「離せ～、離せ～」と騒ぐ美詠子を引きずってレズショーの会場に連れて行きました。美詠子はずっと震えて「許して～」と泣いていましたが、私は許すつもりはありません。会場に行くとレズの女が10～15

人いました。その人達の前に美詠子連れ出しました。

聡子「ふふ、これから皆の前でお尻の穴を丸出しにするのよ」

美詠子「お、お尻の穴を丸出しですって?! どういうことよ! なんなの? この変態女!」

聡子「嬉しいでしょう? 皆にあなたの汚いお尻の穴を見てもらえるんだから」

美詠子「ふざけないで! そんな事させないわ! 離れなさい、変態女!」

優香里「あら? そんなにお尻の穴を見せたくないなんて見られて困る事情でもあるの?」



## 2・子供のイジメを浣腸で償わされた社長夫人

ホテルに呼び出された絵理子はうんざりと溜息を吐いた。そもそも苛められる方に原因があると由香里にも言ったはずだ。だいたい由香里は水商売をやっているだらしない女で、そんな女に育てられた娘がろくなものではないのは周知の事実であり、それをこちらに非があると言わんばかりに責め立てられ、家にまで押しかけられた挙句裁判をすると騒がれて絵理子は心底面倒くさく思っているのだ。

「ようやく来たわね」

ホテルの部屋のチャイムを鳴らせば由香里が顔を出し、絵理子は気だるげに溜息を零した。

「全く、たかが子供の事で裁判なんて馬鹿げているわ。これだから水商売の女は嫌いなのよ。あなたが欲しいのはお金でしょう？で、いくら包めばよろしいのかしら？」

「ふざけないで。あなたが子供を躱ければ良いだけの話よ。それを」

「さすが飲み屋の女ね。片親で育ったから常識がないんでしょね。そんなのだから夫にも捨てられるんだわ。あなたみたいなアバズレの娘なんてアバズレに決まってるわよ。躱がいるのはあなたの娘の方だわ」

「何も反省していないのね。私の娘はクラスの皆の前で浣腸されたのよ。しかも教室で排便させられたんだわ。私の娘は泣いていたのよ。

苛めを止めなかったあなたにだって責任はあります。苛めを経験したらあなただってもっとまじな人になるに違いないわ。私の前で排便しなさい」

「ふざけないで。そんな要求通ると思う？人権侵害だわ。裁判でも勝手にすれば良いのよ。私だって侮辱罪と名誉毀損であなたを訴えてやるんだから」

そこまで言って立ち去ろうとし、絵理子はびくりと震えた。

由香里の背後からぬうっと現れた真里に驚いたのだ。

「あ、あなた誰？」

「絵理子さん、この写真を見てもまだそんな事言われてられるかしら？」

絵理子は真里から突き付けられた写真を見て愕然とする。それは夫ではなく、夫の会社の社員の男と腕を組んでラブホテルから出て来た写真だった。

さーっと青ざめた絵理子に由香里の軽蔑しきった冷たい視線が刺さる。

「この写真を旦那さんに見せられたくなければ私達に従いなさい。データは私のPCに入っているわ」

絵理子は肩を落として項垂れ、ホテルの部屋に入った。大きな音を立ててドアは閉まり、胃袋が圧迫されるような苦しさに絵理子は襲われる。ともかくも由香里と真里の子供じみた苛めごっこに付き合っ  
て、適当に演技でもして帰り、二人を名誉毀損と暴行罪で逆に訴えてやろうと決意した。

「何しているの？早く服を脱ぎなさい」

「服を脱げですって？！ふざけるのも大概にしなさい！何を考えているのっ？！この変態女どもっ！」

「肛門を見せないとこの写真、あなたの旦那様に送るわよ。離婚されたくないんでしょう？」

「そうよ。お尻の穴を見せるだけであなたは離婚しなくて済むのよ。こんなにいい話はないわ」

「あなた達は精神異常者ね。頭おかしいわ。そうよ狂っているとしか思えないわ」

「あら？じゃあ良いのね？この写真をあなたの旦那様に送っても？」

「あなたの旦那のメールアドレス、ちゃんと調べて知ってるのよ？由香里、写真をこの人の旦那に送りなさいな」

「ええ、分かっているわ」

「ま、待って！分かったわよ！お尻の穴を見せれば良いんでしょう！？」

屈辱的な命令に絵理子は耳たぶまで真っ赤にして由香里を睨んだ。由香里の隣では真里が不倫現場を抑えた写真をひらひらさせる。

絶対に訴えてやるから、とぎりぎりど歯噛みして上着を脱ぎ、下着以外の服を椅子の上に放った。

「あらあ？社長夫人さんって随分とお下品なパンツを履いていらっしゃるのねえ。紫色のTバックにガーターベルトだなんて下品だわあ」

### 3・不倫の償いはお尻の穴で

恵は幸子に呼び出されたホテルでむすっとし、顔も合わせないで足を組み椅子に腰掛けていた。

幸子は恵が不倫をした男の妻で、今日はそれについて話があると男の携帯メールから呼び出されたのだ。関係がバレたのなら男とは会わなければ良かったのだが、それでも関係が続けた結果、ついに妻の幸子からホテルに呼び出された。最初は無視をしていたのだが、添付された写真に幸子の旦那と恵がセックスをする姿が撮されていて、来なければインターネットで全世界に流すと脅され、仕方なく恵はホテルに来たのだ。

ホテルの部屋で待っていた幸子は小柄で華奢な幼さの残る女で、長身でグラマラスなボディを持つ美女の恵は頭から舐めてかかった。

「で、写真なんて流したらあなたの評判まで悪くなるわよ。慰謝料なら払うわ。それでデータは消してもらえないかしら？」

「恵さん、あなたの旦那様はこの事を知らないんでしょう？あの人にはプライドが高いエリート商社マンですものね。知られたら離婚されてしまうもの」

「で、慰謝料はおいくら？」

俯いてぼそぼそ言う幸子に恵はふふんと鼻を鳴らして傲慢な様子で言った。

「興信所に調べてもらったの。あなた、借金があったんですってね。その借金を今の旦那様に払ってもらって、あなた自身は無一文。私の旦那はあなたの旦那様の後輩よ」

「だから何？これだからブスは嫌いなのよ。ちょっとした火遊びにかりかりしちやって」

「専業主婦のあなたに私に払うお金があるわけがないわ。私の主人の財布から慰謝料、出させるつもりでしょう」

「で、あなたは何がしたいの？ さっさと結論に入りなさい。こんなところに呼び出してまで私に言いたい事があるのでしょうか」

「そうね。なら悪い事をしたという自覚があるのならそのベッドで四つん這いになってお尻の穴を広げて私に見せなさい」

一瞬、ぽかんとした恵はみるみるうちに顔を真っ赤にしてかっとなってどんとテーブルを叩いた。ティーカップが揺れてお茶がガラスの上にこぼれた。

「ふざけないでっ！」

恵は両手をぶるぶるさせて幸子をじっと睨み、ぐっと奥歯を噛み締めた。幸子は冷ややかな目をして



恵を見詰め、真っ赤な唇を釣り上げると鼻で彼女を笑った。

はっと恵は息を呑む。幸子は携帯をごそごととバックから出してその画面をずいっと恵に見せ、彼女の髪を鷲掴みにし、ぐいぐいと揺さぶった。

「い、痛いっ！離してっ！離しなさいよっ、このっ、変態女っ！」

「そんな事私に言って良いのかしら？私の旦那と不倫するような股の緩いメス豚のくせにね」

「はあ？わけの分からない事言わないで！慰謝料なら払うって言ってるじゃないの！」

「その慰謝料は私の旦那の財布から出るんでしょ？悪い事をしたんだからツケは払っていただかないと私が納得できないわ。ほら、自分でお尻の穴を広げて見せるのよ。やらないならこの写真、インターネットでばらまくわよ」

恵はか一つと首筋まで赤くして幸子を睨むとやがて諦めたかのように服を脱ぎ、ベッドに上がると四つん這いの姿勢になった。両肩が小刻みに震えている。

「ほら、早くなさい。五秒数える内にしなかったら写真をアップロードするわ」

聞いた恵はそろそろと自分の尻を鷲掴みにした。ぐっと力を込めて尻肉に埋もれる肛門を広げて見せる。ぶるぶると震えて恵はぎゅっと唇を噛み締め、両目に涙を浮かべた。

全身の筋肉が硬直する。鼓動は速まり指先まで一気に血液が流れて体中は熱くなった。

「なんてはしたない格好かしら？」

じろじろと肛門に視線を感じて恵は血が出るほど唇を噛み締め、きつく眉を寄せる。かっかと熱くなった体は、肌が白いせいか赤みを帯びる。肛門はひ

くひく動いてそのはしたなさを幸子に見せ付けて、  
恵は消えたくなった。

何故、たかが不倫くらいでこんな恥ずかしめを受けねばならないのかと頬に涙を浮かべる。慰謝料を払うと言っているのに幸子は納得しないで、このような真似をしてきた。不倫を表沙汰にしたくないと思う恵が警察に被害届を出せないと分かっての狼藉だ。恵は悔しくて悔しくてたまらなくなり熱病に犯されたように震え続ける。

「ねえ、本当に反省しているのかしら？人の旦那を寝取っておいて、のうのうと自分の旦那と暮らしているだなんて本当、最低な女ね。反省はしているの？」

「してるわ！」

「嘘だったら奥さんのお尻の穴に浣腸して肛門から汚いウンコを出させるわよ」

#### 4・人妻不倫制裁 女から辱められる浣腸羞恥地獄

「ふわあ～あ。朝日が目に染みるわねえ」

「仕事終わりに客に飲みに誘われたのはいいんだけど、この時間になるとメイクが崩れちゃうわね」

派手なメイクに露出の激しいドレスを着た女性二人は、とある高級マンションへ入っていく。

風俗嬢を職業としている二人が暮らすこのマンションは、もちろん男の貢ぎ物の一つである。

二人はたまたま同じ店で働いていたのだが、話をしているうちにお互いの性癖が似ていることに気付くと、急速に仲良くなっていた。

「んっん～。けれど気分は高揚しているからあ、何だかムラムラしちゃうのよねえ」

顔を赤らめながら寄りかかると、二人の間に濃密な空気が生まれる。

「アンタも好きねえ。で・も、流石に外ではダメよ？  
このマンション、住人達が口うるさいからね」

高級と言われるだけあり、住人は金や権力を持つ者や、家族持ちや愛人をしている者などだ。

高級マンションと聞こえは良いものの、住人達の仲は陰悪と言っていいほどだった。

「——ああ、でも一部の男共に人気の奥様がいるじゃない」

「ええ。一流企業に勤める夫と二人暮らしをしている奥様が、ね。名前はそう……奈津子っていったわね。上品そうな雰囲気があるから、ああいうのが好きな男共はコロっとイクのよね」

たった一人の女の評判が良いことほど、女が不機嫌になることはない。

女としては理想的な生き方をしている奈津子に、女達は心の中で嫉妬しているのだ。

「そういえば奈津子って、アタシと同じ階に住んでるのよねえ。もっともお互い角部屋同士だから、顔を見合わせることも滅多にないけど」

「生活活動時間も、正反対だしねえ。まっ、顔を見ずに済むなら、いいんじゃないの？」

二人はおもしろくなさそうな顔をしながら、エレベーターの前で立ち止まる。

表示を見ると奈津子が住んでいる階で止まっており、少しの間の後、下りて来た。

エレベーター内で二人っきりになると、お互いに身体をピッタリとくっつけ合う。

「アタシの部屋に、寄ってくれるでしょう？」

「はいはい」

怪しい空気が流れるのも束の間、目的の階で止まる。

二人はほぼ同時にエレベーターから下りたものの、  
一人がふと、ある現場を見て立ち止まった。

「ねっねえ、アレ、見てよ！」

小声で叫びながら、もう一人の女性の腕を掴んで揺  
さぶる。

「どうしてのよ……って、アラ」

二人の視線は、同じ階の角部屋へ向かう。

一つの扉が中から開いていた。そこは奈津子という  
人妻が夫と暮らす部屋——だったのだが。

奈津子が私服姿の若い男と、頬を赤らめながら話している。そして男は奈津子に手を引かれながら部屋の中に入ったのだが、扉が閉まる瞬間、二人が抱き合いながらキスするところを見てしまった。

「……彼、ご主人じゃないわね。確か年上で真面目そうなサラリーマンって感じの男だったもの」

「あの男は逆にスポーツマンタイプね。身体が服の上から見ても鍛えているようだし、性欲も凄そう♪」

二人は顔を見合わせながら、クスクスと笑う。

そして部屋に入ると、二人は笑みを浮かべながら抱き合い、熱いキスを交わす。

「……んふふっ♪ 良い事、思い付いちゃった」

「アラ、なあに？」



二人は抱き合いながら寝室に入り、共にベッドに倒れ込む。

「最近、客に『肛門に浣腸をしてくれ』って懇願されることが多くてね。でもほらあ、ああいうプレイって気をつけないと、こっちにもダメージがくるでしょう？ だから誰かで実験をしたいなあって、思っていたところなの♪」

「アラ、それじゃあ良い実験体を見つけたじゃない。きっと彼女、まだそういう経験はないわよ？」

「そうですねえ。育ちも良さそうだし、そういうプレイがこの世にあることすら知らないんじゃない？」

「でもだから良いのよ。せっかくだし、良い社会勉強

をさせてあげましょう」

「良い考えね。それじゃあこっちも初心者用に、ちゃんとして準備と用意をしないとかなきゃ。プロとして、恥ずかしくないようにね？」

二人は悪魔の笑みを浮かべながらドレスと下着を脱ぎ捨てて、ベッドの中で淫らに絡み合う――。

――数日後。

奈津子は突然の来客に、眼を丸くした。

朝、インターホンが鳴り、カメラで見ると、派手な女性二人組がやって来たのだ。

「あの……どちら様ですか？」

『やあねえ、同じ階に住んでいるのよ。こっちの人も

別の階だけど、同じマンションに住んでいるわ』

二人はニコニコと愛想よく笑いながら、手を振っている。

言われてみれば確かにマンションの住人同士の会で、何度か顔を見ていた。けれど夜の仕事をしているとかで、普段は滅多に顔も見ない。

『中に入れてくれないかしら？ ちょっと見せたいものがあるのよ』

「はあ……」

住人同士のトラブルは避けたい。玄関先で騒がれ続けられては、他の住人達にトラブっているのかと思われてしまう。

せっかく夫が住まわせてくれている高級マンションを、下さらない理由で去りたくはない——。この時、

奈津子はそう思ってしまった。

そして扉を開けて、二人を招き入れてしまう。

「あらあ、キレイにしているのねえ」

「流石は奈津子奥様。このマンション内で人気ナンバー1の女性ね」

二人がブランド物の大きなバッグを持っているのが少し気になったものの、奈津子はリビングルームに通した。

ソファー椅子に座ると、奈津子は恐る恐る尋ねる。

「それであるの……『見せたいもの』って何ですか？」

「せっかちなねえ。でもそういうの、嫌いじゃないわ」

同じ階に住むと言う女はクスクスと嫌な笑い方をしながら、ラインストーンで派手にデコったスマートフォンを取り出して、画面を見せてきた。

「……っ！？ こっコレは……」

「画面に映っているの、奥様よね？」

「そして抱き合いながらキスをしているのは……旦那様ではなさそうね。一体、誰なのかしら？」

画面に映っているのは、ほんの十秒ほどの動画だった。

映っているのは奈津子が玄関先で、若い男と抱き合いながらキスをしている場面だ。奈津子と男はまさか撮られているなんてことには気付かず、部屋の中に入って行く様子まできっちり映っている。

二人ははじめて奈津子の浮気現場を見た後、何度か

浮気相手が再び訪れるのをこっそり部屋の中で待っていた。すると数日後には、この動画を録画することができたのだ。

「この男、旦那様が仕事に行った一時間後に、この部屋に来るのね」

「そしてあなたと熱い抱擁とキスを交わしながら、部屋に入る——。凄い不倫現場ね」

「そっそれは……」

見る見るうちに、奈津子の顔色が悪くなる。

「でも分かるわあ。あなたの旦那様、見るからに性欲弱そうだもんね」

「いくら金銭面や愛情面で満足させてくれても、性欲が弱いんじゃあ男としては話にならないわよね」

二人は僅かに同情しながら、奈津子を見つめた。

——確かに二人の言う通り、奈津子の夫は妻を愛してはくれているものの、夜の営みはほぼ無いと言ってもいい。たまにあったとしても、一回で終わりというお粗末な結果になるのだ。

性欲を持ち余していたある日、大学生時代に付き合っていた元カレが、配達員として奈津子の部屋に訪れた。

奈津子が何となく仕事が休みの日に遊びに来ないかと元カレを誘うと、アッサリOKしてくれたのだ。そして夫のいぬ間に訪れた元カレと、あっさりヨリが戻ってしまう。

元カレは平日が休みだったり、午後から仕事というシフトを組んでいるようで、夫がいない時に来てくれることが多い。

そうして夫では満たされない性欲を、元カレで発散させていたことは事実。

しかしだからと言って、奈津子は夫と離婚する気はさらさら無かった。夫は真面目で浮気などせず、奈津子を愛してくれているし、何より金銭面ではかなり余裕のある生活が送れているのだ。

アルバイトの配達員として働いている元カレとは、天と地ほどの生活の差がある――。

元カレはそういう奈津子の冷静な意見を受け入れており、元サヤに戻らない代わりに奈津子から金を受け取って相手をしているのだ。

だがこのマンションは昼間普通に働いている住人が多く、朝の不倫現場を目撃されるなんて夢にも思わなかった。

「なっ何が目的ですか？ お金ですか？」

震えながら必死に声を絞り出すと、二人はキョトンとする。そして次の瞬間、大声で笑いだす。



「あーっはっはっは！ 笑わせないでよ！」

「こう見えてもあたし達、結構稼いでんのかな？ 貢いでくれる男もいるしねえ」

そう言いながら、ブランドのバッグを振って見せる。

「じゃあ何が欲しいんですか？」

改めて奈津子が聞くと、二人は笑うのをピタリと止めた。

そして獲物を見つけた肉食獣のような眼差しを、奈津子へ向ける。

「実はねえ、奥様。アタシ達、SMクラブの女王様をやっているの」

「えっSMクラブ……ですか？」

「そうよ。でもね、最近お客様の要望で肛門プレイを勉強しているんだけど、良い相手役が見つからなくてねえ。奥様に、その相手役をしてもらえないかしら？」

「『肛門プレイ』ってまさかっ……お尻の穴を……？  
なっ何をバカなことをっ！ ふざけないで！ どうしてわたしがそんな下品なことをしなきゃいけないの？」

驚きと衝撃で奈津子は美しい顔を陰しく歪めて、思わずソファー椅子から立ち上がった。

「アラヤダ、不倫なんてもおっとバカで下品なことをしている人に、言われたくはないわね」

「そうそう。この不倫動画、旦那様に見せていいの？」

何度もリピートされている動画を目の前に突き付けられて、奈津子は顔を背ける。

夫とは離婚したくはない——。ならば選べる選択肢など一つしかないのだが、セレブ妻であるプライドが、なかなか折れてくれない。

無意識の内に奈津子は唇を噛みしめ、言葉が出るのを封じる。

どうにかして二人に動画を消してもらおう方法を考えているのだが、自分よりも下位の生活を送っている女達に屈してしまうことが悔しくてならない。

そんな奈津子の心情を察してか、女達は余裕ありげに微笑んでいる。獲物が自らその身を差し出さなければならぬ状態に追い込んでいることに、悦びを感じているのだ。

「さあ、どうするの？ お金持ちの旦那様と、離婚し

たいのかしら？」

「今回だけで良いのよ。あたし達の実験に付き合ってくれるのなら、ちゃんと動画は消してあげるから」

「あっ相手をしたら……その動画を消してくれますか？」

「もちろん♪ この動画を消すことを報酬にしてあげるわ」

「奥様にとっては、お金よりもそっちの報酬の方が嬉しいでしょうね」

涙を浮かべながらも、頷くしなかない奈津子。

新しいおもちゃが手に入ったことを、二人は心から喜んだ。

「それじゃあまずは裸になって、そのソファ椅子に背中を向けて座りなさい」

奈津子は言われた通りに震えながら服も下着も脱いで、二人に背を向けるようにソファ椅子に座る。

「そしたら腰を上げて、お尻の穴をよお一つ見えるように両手で開いて見せてよ」

「ううっ……！」

奈津子は今までの人生の中で、人前で肛門を自ら見せたことなど無い。腰を上げたものの、すぐるような眼差しを二人に向ける。

「あっあの、本当に見せるんですか？ その……さっき出したばかりなので……、きつ汚いかと……」

「シャワーでも浴びて、キレイにしたいの？ バカなこと言っていないで、さっさと見せなさいよ！」

「それともちゃんと拭いていないのかしら？ まさかセレブな奥様はそんなことないわよね。汚くてもいいから、見せなさい」

厳しく冷たい言葉が、奈津子に降り注ぐ。

眼が赤くなるほど涙をにじませながら、奈津子は震える手で尻肉を開いて見せた。冷たい空気が敏感な部分に触れて、白くきめ細かい肌が粟立つ。

「アラ、綺麗なピンク色をしているのねえ。シワもはっきり見えるし、まだプレイ未使用ね」

「うっすらと陰毛が生えているわよ？ 使わないからこそ、お手入れがおろそかになるのね。——けれど

小さなホクロは可愛いわね♪ こんなところにホクロがあるの、あなた知ってた？」

ふうっと息を肛門に吹きかけられ、奈津子はビクッと肉体を揺らして両手を離す。

「ひゃんっ！？ やっやめてください、もう見ないで……！ 恥ずかしいっ……！」

羞恥心でいっぱいになった奈津子は、両手で顔を覆ってしまう。

「イヤねえ。顔を見なきゃ、反応が分からないじゃない」

「まあまあ。初心者なんだから、許してあげましょうよ。——その代わり、そろそろ実験をはじめて良いわ

よね？」

「まっまだ続けるんですか？」

「肛門をさらけ出したぐらいで、音を上げてんじゃないわよ」

「こっちはせっかくいろんな道具を持ってきたんだから、楽しませてちょうだい♪」

そう言いながら女達は持ってきたバッグの中から、おもちゃのようなサイズの注射器と、白いプラスチックのボトルを取り出す。針のない注射器に、手慣れた仕草でボトルの中身を入れていく。

注射器を満たしていく透明な液体を見て、奈津子は不安を感じる。

「あの……それ、何ですか？」



「グリセリンよ。ひびやあかぎれにつけて怪我を治す  
以外にも、浣腸に使う薬品として有名ね」

「今じゃあ通販で、手軽に素早く手に入れることがで  
きるのよ」

「かつ浣腸？」

飲む方の便秘薬ならば CM や雑誌で何度でも見たこ  
とがあったが、強制的に排便させるこんな方法を、奈  
津子は今まで知らなかった。

恐怖で顔を歪ませる奈津子をニヤニヤと笑いなが  
ら見ている二人は、グリセリン入りの注射器を軽く振  
る。

「本当は水で 30ml に薄めて使うのが、成人女性への  
本来の使い方らしいけれど」

「この注射器は 100ml も入っちゃうのよねえ。でもまあ不倫なんて刺激的なことを好む奈津子奥様なら、薄めず使っちゃってもこのぐらい平気よね？」

「まっ待って！ まさかっ、それをわたしに……？」

「当然でしょう？ お尻の穴にこの注射器をブツ刺して、中身を全部入れてあげるわ」

「朝、出したばかりでも、きっとお腹の中にはまだ汚いモノが残っているわ。コレでスッキリさせちゃいましょう」

「ひいっ！ いやっ、止めて！」

慌てて逃げ出そうとする奈津子を、二人は素早く押し止める。